洗足学園音楽大学

室内楽セレクション・準セレクションチーム
シルバーマウンテンコンサート 2021

2021年 9月23日（木・祝） 開演 14:00 開場13:30

会場　シルバーマウンテン　1階

～ 新型コロナウィルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い ～

・着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
・大声や対面での会話はお控えください。
・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

【主催】洗足学園音楽大学・大学院

ごあいさつ

本日は、洗足学園音楽大学「室内楽セレクション・準セレクションチーム シルバーマウンテンコンサート2021」にご来場頂き、誠にありがとうございます。

本日演奏するチームは昨年度、厳しい2回の審査により選抜された学生のグループです。編成、楽器種が異なる魅力あるプログラミングを我々、室内楽を担当する教員や履修学生も楽しみにしております。

新型コロナ禍で音楽関係も様々な制約を受けてきました。学内の練習にも「パーテーション」を設置してソーシャルディスタンスをとるなど工夫を凝らして練習を重ねてまいりました。その中で個々の音楽を相談し合い、また時には意見をぶつけ合い重ねてきた練習の成果を、存分に発揮して頂きたいと思います。

ご来場の皆様方には、若く瑞々しい音楽のアンサンブルにどうぞ、暖かい拍手と激励のお言葉を送って頂く事をお願い致します。

室内楽委員会議長
フルート教授
渡部 亨

Program

第一部　準セレクションチーム
テューバ四重奏

1st. 吉田 怜生　2nd. 渡部 陽菜　3rd. 吉海 風龍　4th. 齊藤 徹也

J.スティーブンス／ディバージョンズ
John Stevens (b.1951) // Diversions

Prologue
Ⅰ. Latin Feel
Ⅱ. Slow Free Very Bluesy
Ⅲ. Fast
Epilogue

～休憩～

第二部　準セレクションチーム
ピアノ四重奏

Fl. 福井 麻菜　Ob. 佐藤 千尋　Cl. 石橋 優安　Pf. 丸山 歩

J＝ミシェル・ダマーズ／フルート、オーボエ、クラリネットとピアノのための四重奏曲
Jean-Michel Damase (1928-2013) // Quatuor pour flûte,hautbois,clarinette et piano

第1楽章　Moderato
第2楽章　Allegretto
第3楽章　Andante
第4楽章　Allegro Vivace

～休憩～

第三部　セレクションチーム
弦楽四重奏

Vn.1st. 松本 志絃音　Vn.2nd. 山下 智史　Va. 山本 里真　Vc. 原 美月

A.L.ドヴォルザーク／弦楽四重奏曲 第12番 ヘ長調 作品96, B.179「アメリカ」
Antonín Leopold Dvořák (1841-1904) // String Quartet No.12 F major, Op.96, B.179, “America”

第1楽章　Allegro ma non troppo
第2楽章　Lento
第3楽章　Molto vivace
第4楽章　Finale. Vivace,ma non troppo

第一部　準セレクションチーム
テューバ四重奏

1st 吉田 怜生(3年)
Reo Yoshida

3rd 吉海 風龍(3年)
Fura Yoshikai

2nd 渡部 陽菜(3年)
Hina Watanabe

4th 齊藤 徹也(3年)
Tetsuya Saito

Program Notes

J.スティーブンス／ディバージョンズ

この曲はアメリカ合衆国のテューバ奏者で作曲家のジョン・D・スティーブンス（b.1951）の作品である。作曲スタイルはロックやジャズ、現代音楽まで多岐に渡り、彼の作品の主な編成は金管楽器、特にテューバ、ユーフォニアム、トロンボーン、テューバ＆ユーフォニアムアンサンブル、金管五重奏、その他金管楽器を組み合わせた編成の作品などがある。

「Diversions」（1978年）は、作曲当時の一般的な作曲スタイルとは異なりテューバアンサンブルにジャズやポピュラー音楽を取り入れた意欲作品であるため、テューバアンサンブル史の中で重要な楽曲のひとつである。プロローグとエピローグはジャズバラードスタイルになっており、プロローグとエピローグを除いた3つの楽章は、ラテンジャズ、スローブルース、アップテンポジャズワルツスタイルで構成されている。この作品の特徴は、テューバ4本の役割をリズム・セクションとメロディー・ヴォイスの2つに分散させ、曲全体のコントラストを効果的に変化させることで、より革新的なサウンドへ作り上げるという点である。各楽章にはジャズ・ソロパートがあり、即興的な音楽にも注目していただきたい。

テューバ　3年　渡部 陽菜

第二部　準セレクションチーム
ピアノ四重奏

Pf. 丸山 歩(4年)
Ayumu Maruyama

Ob. 佐藤 千尋(4年)
Chihiro Sato

Fl. 福井 麻菜(4年)
Mana Fukui

Cl. 石橋 優安(4年)
Yuan Ishibashi

Program Notes

J＝ミシェル・ダマーズ／
フルート、オーボエ、クラリネットとピアノのための四重奏曲

ジャン=ミシェル・ダマーズは1928年フランスのボルドーに生まれる。ハープ奏者である母をもち、ダマーズ自身も幼少期から音楽の才能を発揮していたと言われている。フランス政府公認の高等教育機関であるエコールノルマル音楽院を卒業し、13歳でパリ音楽院に入学、ピアノ、作曲、対位法を学ぶ。1943年にピアノ科で一等賞を受賞し卒業する。ダマーズは当時主流であった現代音楽ではなく新古典主義に基礎をおいた美しい旋律の作品を作曲した。本日演奏する四重奏曲はダマーズの代表作の一つである。

第1楽章　Moderato
優美な主題が色彩を変化させながら美しい世界観を作り出し、またピアノと木管三重奏の対比がよく描かれている。

第2楽章　Allegro
がらりと雰囲気を変え、軽快で楽しげな音楽である。中間部ではダマーズ特有の親しみやすく、美しい旋律が繰り広げられる。

第3楽章　Andante
フルート、オーボエ、クラリネットの順で叙情的な旋律が演奏される。徐々に3つの楽器が合流しユニゾンの音楽が展開される。

第4楽章　Allegro vivace
軽快かつ優美な楽章である。まるでダンスを踊っているような旋律駆け巡り、これまでの楽章の主題も奏でられ華やかに幕を閉じる。

フルート　4年　福井 麻菜

第三部　セレクションチーム
弦楽四重奏

Vn.1st 松本 志絃音(4年)
Zion Matsumoto

Vn.2nd 山下 智史(4年)
Satoshi Yamashita

Va. 山本 里真(4年)
Rima Yamamoto

Vc. 原 美月(卒)
Mizuki Hara

Program Notes

A.L.ドヴォルザーク／
弦楽四重奏曲 第12番 ヘ長調 作品96, B.179「アメリカ」

アントニーン・レオポルト・ドヴォルザーク（1841-1904）は、現チェコ共和国（当時のオーストリア＝ハンガリー帝国）の作曲家である。西洋音楽史上では、後期ロマン派（1850年頃から1900年代初頭）に位置し、代表的なチェコ国民楽派に分類される。国民楽派とは、主に当時のロシアや東ヨーロッパ、北ヨーロッパなどにおいて、ドイツ、フランス、イタリアといった音楽先進国の影響を受けつつ、それぞれの民族音楽独自の特徴を捉えて芸術音楽へ繋げ、民族主義的な音楽を創作した音楽家を指す。当時、日本は江戸時代の暮れから明治の文明開花へと社会が急速に変化していく時期であったが、同じく帝国の圧政や民族主義への動きなど、かつてのチェコも激動の時代であったことは間違いない。そのような中で彼は、スラブ舞曲集をはじめ、自国にある民謡の旋律や舞踊のリズムなどを用いて、より高度なレベルで西洋音楽と融合させた作曲家であった。

1892年9月（50歳）、作曲のみならず優れた教育者でもあったドヴォルザークは、ニューヨークにあるナショナル音楽院の院長として招かれ、家族と共にアメリカへ移った。翌年の1893年5月には、彼の作品の中でも主要な 交響曲第9番『新世界より』(作品95）を創作している。直後の6月、アメリカでの最初の夏季休暇をアイオワ州のチェコ移民の村スピルヴィルで過ごした際、弦楽四重奏曲を書き上げた。その作品こそ、本日演奏する『アメリカ』(作品96）であり、彼の弦楽四重奏曲の中でも今日最も親しまれ、よく演奏されている曲である。『アメリカ』という名の通り、ドヴォルザークが渡った当時アメリカ社会で蔑まれていた黒人の伝統的な黒人霊歌、そしてそれ以上に追い詰められていたインディアンの踊りなどをモチーフとして作られており、彼らを取り巻く難しい社会的状況と自らの祖国チェコへの想いを重ね合わせたことが背景にあるのではないかと言われている。描かれた土地やモチーフこそ祖国チェコのものではないが、その点では国民楽派の音楽と共通していると認める事ができるだろう。また、本作品はスケッチ（作曲上の枠組み）だけでもわずか3日間で終え、そこから約2週間で書き上げられたと言われており、同時期に書かれた交響曲を含め、当時の彼の創作意欲が相当なものであったことがわかる。

第1楽章　Allegro ma non troppo

冒頭、F-Dur の調性の中でヴィオラが弾く黒人霊歌のモティーフを模倣しながら曲が展開されていくと思いきや、第二テーマは A-Dur へと転調し、哀愁漂うコラールのような響きの中を第一ヴァイオリンが歌い上げる。その後、模倣、展開をし、劇的な和声の変化をくぐり、はじめの主題に戻っていく。

第2楽章　Lento

d-moll の寂しく、しかし何処か懐かしいような調性感の中で、第一ヴァイオリンから歌がはじまっていく。

第3楽章　Molto vivace

舞曲である。しかし洗練されたものではなく、極めて民衆的で明るく明快なリズムで書かれている。

第4楽章　Finale. Vivace ma non troppo

第二ヴァイオリンとヴィオラが特徴的なアップテンポのビート感を作り、その中を第一ヴァイオリンのメロディーが駆け抜けていく。中間部にはややコラールのような部分が出てくるがすぐにビート感を取り戻し、テーマへと戻る。この楽章だけでもビートの種類が少なくとも4種類あり、それぞれが特徴的で、且つ曲全体をより華やかなものにしている。

ヴァイオリン　4年　山下 智史